

教養基礎教育研究年報発刊に寄せて

教養基礎教育主管 大 好 直

本研究年報に寄せられた7件の論考は、いずれも筆者の熱意を感じる。視点や立場は異なっても教育に携わる者として、教育の質の向上を図るためには何をしたら良いかということが、常に念頭にあるからと思う。教育現場では、どの局面で具体的に何をすればよいか、どの様な手段で誰が実行に移すか、実行後どのような状況が生まれるかなど検討課題が山積している。そして実行に移すための様々なシナリオを想定しなければならないが、策を立てて実践する段になれば、予想外の展開があってはならないと神経を使っているのではないだろうか。特に、想定したシナリオが独善的であってはならないので、多面的に関連情報を収集し、時間をかけて検討すべきなのだろう。秋田大学の教育改善は構成員の共通認識を大切にする精神で成り立っているが、そのような中で年報は、

共通認識を育む重要な役割を果たしてきている。寄稿者にとって年報は考え方を公にするよい機会になると同時に、読者にとって年報は主張内容を検討できる良い機会になる。そして年報での提案に対して歩調を合わせて実践するか、あるいはそれをヒントとして更なる良い具体的な策を生み出すか、検討することになる。もし、新しい展開の役割を果たす論考となれば、大きな教育業績として評価することができる。今回の投稿のほとんどは執筆教官から自発的になされたものであり、それは教育研究への熱い思いが秋田大学の教官の間に確実に広がっている現われである。今回、投稿しなかった教官も年報等の執筆活動の機会を求めて学内の更なる相互理解が進めば、多くの教官に受け入れられる新しい展開も期待できる。